

じねんじょ【パイプ栽培】（普通）

栽培暦

作型	月	3	4	5	6	7	8	9	10	11~12
露地普通 (パイプ栽培)		催芽	定植	敷きわら 支柱立て	追肥	追肥	(追肥)	(追肥)	むかご収穫	収穫

栽培の特徴とポイント

湿害に極端に弱いので、排水良好なほ場を選定する。パイプ栽培の場合土耕の深さは50cm程度でよい。また、優良系統を選択して栽培することが重要である。

品 種

自 然 薯：種いもは自生しているものを採取する等して入手するが、ウイルス病等で生育が悪く（在来優良系統） なることがあるので、生育状況から優良なものを選抜しながら、数年置きに種いもを更新する必要がある。

育苗管理

1 種いもの切断と消毒

種いもを70~80g程度の大きさに切断する。殺菌剤に10分間浸漬し、天日で1日乾かした後、日陰で2~3日切り口がカリカリになるまで乾かす。部位別（頭、中、尾）に仕分けておく。むかごから養成した1本いもを用いることもできる。本ぼ10a当たり種いも必要量は約250kgとなる。

2 催芽

- 1) コンテナ等に川砂をいれて、種いもがかくれる程度に埋め込む。種いもと種いもが触れない程度とする。部位別に分けて植え込む。
- 2) 箱詰めした種いもは1週間程度常温の室内におき、傷口の癒合をはかる。
- 3) 乾式の水稲育苗器、ビニールハウス内でのトンネル被覆等により、温度が25 程度の多湿条件で催芽する。育苗催芽中は乾燥させないようにする。腐敗した種いもは速やかに除去する。
- 4) 部位により萌芽に早晚がある。芽の長さが3~5cmになったら外気で1週間程度馴らす。

定植前の準備

1 パイプの土詰め

山土で地表下1~1.5m位の無菌、無肥料の赤土をパイプ1本当たり4kg程度詰める。石や木の根は除く。

2 秋耕と有機物施用

前年の秋に完熟した堆肥を4t/10a程度施用してから耕起しておく。

3 植え溝掘とパイプの埋め込み

- 1) 畝幅120~130cm。畝の中央部に幅20~30cm、深さ40~50cmの溝を掘る。
- 2) 株間25~30cmの間隔で約15度の傾斜をもたせてパイプを埋め込む。
- 3) 少なくともパイプ底部が滞水しないようにほ場の周囲に深さ60~70cmの排水溝を掘っておく。平地ではさらに10mに1本位の割りに排水溝を掘る。

4 案内棒立て

パイプ受け部の上に長さ 30cm の板状の棒を立てて植え付けや掘り取りの目印とする。案内棒の上 10cm を残して覆土する。

5 基肥施用

パイプを埋めたら畝を整形する前に基肥を全面施用し、畝立てする。

施肥例 (kg / 10 a)

肥料の種類	総量	基肥	追肥		成分量		
					N	P	K
完熟堆肥	4,000	4,000					
有機質肥料	470	170	150	150	28.2	28.2	28.2
過リン酸石灰	30	30				5.1	
合計					28.2	33.3	28.2

定植

順化した苗を順次定植する。案内棒に添わせて植え込み、覆土は 5cm 程度とする。その上を切りわらやもみがらで覆う。

本ば管理

1 支柱立てと誘引

1 株 1 本ずつ長さ 3m の竹等を立てて合掌に組む。支柱の先端は揃えておく。ほ場を見回ってつるが垂れ下がらないように誘引する。

2 敷きわら

つるが 2~3m 伸びた頃に厚めに敷きわらをして、乾燥や雑草の発生を防止する。

3 追肥

6 月中旬、7 月中下旬の 2 回、有機質肥料 150kg/10a を畝肩に施用し、その後はつるの繁茂状況を見て弱い場合は随時施す。

4 かん水

晴天が続いてほ場が乾燥したら、地温の低い時間帯にかん水する。

5 台風対策

強風などによる支柱の倒伏は、つるを切断し致命傷となるので、台風などのときは支柱を補強し、場合によっては事前に支柱を倒して風の害を和らげる。

6 収穫

11 月に入り 1~2 度霜が降って茎葉が完全に黄化したら収穫する。

病虫害防除

炭そ病、葉渋病：肥切れしないよう適正な施肥を行い、収穫前に茎葉を集めて焼却する。

褐色腐敗病：健全な種いもを使用し、連作を避ける。被害株はほ場外に出し埋める。窒素肥料の多施用をさける。土壌消毒、種いもの浸漬消毒を行う。

販売のポイント

贈答用等、直売を主体とする。